

ROTARY CLUB OF NAGOYA MEINAN 2013-2014 WEEKLY REPORT

ロータリーを
実践し



みんなに
豊かな人生を

名古屋名南ロータリークラブ

■承認 / 1991年3月8日 ■例会日 / 火曜日・PM6:30 ■例会場 / 名古屋マリオットアソシアホテル
■会長 / 白藤 憲雄 ■幹事 / 本多 利郎 ■会報・雑誌・広報委員長 / 安藤 修
■事務局 / 〒450-6002 名古屋市中村区名駅1丁目1番4号 名古屋マリオットアソシアホテル 2202号
TEL.052-586-2043 FAX.052-586-2054

URL <http://www.meinan-rotary.com> E-mail info@meinan-rotary.com

2013-14年度 国際ロータリー会長 ロン D. パートン

第1092回

2014年5月27日(火) 晴 第40回

～みんなに豊かな人生かどうか考える月間(地区)・環境保全週間(地区)～

斉唱 それでこそロータリー
出席 会員56名(出席率算入人数48名)
出席40名 出席率83.3%
前々回補填率93.62%(5月13日分)
ゲスト 名南RC混声合唱団
指揮者 友森 美文さん

会長あいさつ

会長 白藤 憲雄さん

皆さま、こんばんは。5月の例会も本日が最後で、残りの任期も6月の1ヶ月となりました。来月は台北ミレニアムRCに出かけて参ります。まだ空きが多少残っておりますので、都合のつく方はお申し出いただければと思います。



7月21日は海の日です。先日、第四管区海上保安本部長から、理事に就任してから10年が過ぎたということで、表彰状が頂けるという連絡がありました。海上指導員の任命を受けてから、名古屋海上保安部長、第四管区海上保安本部長、海上保安庁長官賞、そして今回四回目の表彰を受けることとなりました。微力ではありますが、海の交通安全、事故防止に貢献できたかと思っております。また気持ちを新たに活動に力を入れ、頑張っていこうと思っております。海も陸も安全運転でお願いします。車に乗ったらシートベルト、船に乗ったらライフジャケットと覚えておきましょう。

幹事報告

幹事 本多 利郎さん

- 来週6月3日(火)は例会変更となっております。6月7日(土)の全国親睦合唱祭に皆さま是非出席していただきたいと思っております。場所は愛知県芸術劇場コンサートホールで、時間は12時開演です。
- 6月24日(火)の例会は、急遽ホテルの都合で例会場が使用できなくなり、キャッスルプラザでゆったり例会をさせていただきます。キャッスルプラザ1階ローズガーデンで18時30分から行いますので、是非出席していただきますようお願いいたします。

ニコボックス

- ◆友森先生いつも合唱団で大変お世話になっております。今日は楽しみにしています。

大平 明子さん 木村 猛さん 浅井 浩さん
江松 央統さん 伊藤 圭一さん 坂田 信子さん
長尾 浅吉さん 宮崎 良一さん 三島多恵子さん
森田敏二三さん 鈴木 一博さん 田子 充浩さん
三浦 和人さん 久米 伸治さん 有川 英敏さん
坂本 晃さん 猪村 美之さん 朝比美和子さん

- ◆野に山に新緑と花の美しい季節になりました。

新原 尚さん 佐々木 暢さん 入谷 直行さん
安藤 修さん 川瀬 悟さん 白藤 憲雄さん
中村 勝さん 本多 利郎さん 三浦 隆さん
犬飼りさ枝さん

本日合計 30,000円 累計 1,256,000円

同好会報告

- 名南RC混声合唱団 川辺 清次さん
皆さま、こんばんは。全日本RC親睦合唱祭が6月7日に行われます。今まで名古屋地区で行っていたチャリティーを、全国大会にまで幅を広げようということになります。二回ほどRCで募金をお願いしたのですが、今のところ40,000円ということで、例年に比べると少し少ないかなと思っております。強制ではございませんが、各テーブルを回らせていただきますので、よろしくお願い致します。

アンチエイジングエクササイズ

中村 勝さん

外部卓話

- 名南RC混声合唱団 川辺 清次さん
名南RC混声合唱団は今年7月で満12年になります。設立当初からご指導を賜っております友森さんに今日は卓話をお願いしております。皆さまご存じの通り気さくな方ですので、よろしくお願い致します。

■名南 RC 混声合唱団

指揮者 友森 美文さん

皆さま、こんばんは。今日はオペラの魅力について少しお話しさせていただきます。年が明け、2014年になってから約半年くらい経ちますが、この約半年の間にオペラを観に行かれた方はどのくらいいらっしゃるでしょうか?世間一般的には、余裕のある紳士淑女の集まりということなので、オペラを鑑賞するというのも、紳士淑女のたしなみと言えるのでお聞きしたのですが、残念ながら鑑賞者は0でした。



私はよく、高校生や生涯学習センターの講座で一般の方に「オペラとは皆さまにとってどのような印象ですか?」とアンケートをとります。すると、「豪華な感じがする」「あの独特な歌声が…」「とっつきにくい」「小難しく」などが挙がりますが、断トツで多いのが「値段が高い」でした。よく海外の公演が名古屋にも来ますが、一番値が張るような席は、40,000円だとか、一番安い学生席でも5,000~6,000円はします。

では、何故日本ではこんなに高いのか?ということなのですが、例えば、愛知県芸術劇場で一つ公演を行うとします。一日公演を行うにも準備が必要です。会場を押さえるだけでも一晩で100万円位はかかります。そして、音響や舞台装置、大道具、小道具はもちろん、衣裳なども大変ですし、宣伝などの費用もかかります。更に当然のことながら出演者には出演料を払わなくてははいけません。出演者というとソリストだけではありません。コーラスも入りますしオーケストラも入ります。大きい公演だとバレエ団が入ってくるようなこともあります。更にスタッフの人件費が加わり、一本公演を行おうとすると4,000万~5,000万円はかかります。それをチケットの枚数で割り振りをしなくてははいけないので、非常に高い値段になっていきます。ところが、海外でオペラの公演を観た方は、「海外ではすごく安い」と思われるかもしれません。海外では国からの援助があるからです。つまりオペラというのは莫大な費用がかかるけれども、それを支払ってでもやる価値があるということで保護されています。日本も、戦後は楽しむためにお金をかける経済的な余裕はないという時期があったとは思いますが、それからしばらく月日が経ち、経済大国といわれているにもかかわらず、現状としては昔と全然変わりがなくて自分達としては残念なところではあります。

オペラというのは、歌うこと、演じること、語ること、踊ることなど総合的なことなので、当然のことながら、誰でも、いつの時代でも、どこで起こってもおかしくないような題材が中心になってきます。それが庶民の芸術となり、西洋では民衆から民衆へ広がってきました。ところが、日本へ入って来た時に、日本でもそのまま広がれば良かったのですが、西洋のものをなんとか咀嚼しなくてはならないということで、楽しむ前に研究をするという要素が入ってきてしまい、そのあたりが堅苦しいような状況になっているのではないかと思います。

オペラの歴史ですが、もともとは16世紀頃のイタリア、フィレンツェあたりから始まったお芝居です。ですから、基本は台詞です。けれども、台詞一つに

実は音符がついています。よく考えてみると、「普通に喋ればいいのに、何故、音符がついているのか。」と不自然な感じがします。そして、その不自然さはどうしても否めないのが、当時はどうしたかといいますと、極力不自然さをなくすために、少しでも不自然でない題材を選び、ギリシャ神話などの英雄伝説だとか、空想的なものにしたわけです。そして、興奮してきてここぞという時に、喋り風の歌と台詞の中途半端な所を一気に凌駕して、思いっきり朗々と歌っていくという動きになっていく、そんな歴史があります。

今度は、実際に音楽のウエイトを占める声や歌にスポットを当ててみます。よく小学生に「オペラの声はだしてごらん」と言うと、必ず男の子でも裏声で歌ったりします。日常生活の中で、特に女性はそうなのですが、裏声では生活をしていません。圧倒的に地声のほうが聞き取りやすいのですが、敢えて裏声を使うということには理由があります。裏声は圧倒的に音域が広いということと、地声で2、3時間歌うとかなり疲れるのですが、裏声だと疲れにくいのです。男性は裏声で歌うことはないかもしれませんが、女性は普段喋っている地声のトーンで歌ってしまうよりは、まわした裏声でのほうがはるかに疲れにくいのです。そして、もちろん地声より裏声のほうがずっと先に届くのです。そういうようなメリットがたくさんあるので、ちょっと不自然に思われるような声で歌うという形になっています。そして、あのような訓練された超人間的な声を聞くと、否応なしに「この人はすごい!」という感じになります。それは、誰よりも早く走る、跳ぶなどのアスリートに対してのその感覚に通じると思います。

声の魅力もそうなのですが、作品的にも魅力がないとオペラというのは成立しません。オペラの扱っている内容というのは、本当は小難しくもなんともないのです。昔も今もテーマとして扱われるのは、死ぬことや生きること、それから80~90%は恋の物語です。男女間の愛のもつれや、親子愛、祖国に対しての愛、あとは忠誠心や義理人情などの世界が扱われていきます。これは、スタイルは違うかもしれませんが、本質に流れているものというのは全然変わりません。結局、オペラはもともと庶民のものであり、当時の庶民はそんなに教養が高かったわけではないので、そういう人たちにもわかりやすい内容をということで、スキャンダラスな内容が多いです。人の不幸やスキャンダラスな内容が好まれるのはどこの国でも変わりません。例えば、日本でもよく上映されるのが、近松門左衛門の浄瑠璃や歌舞伎、曾根先心中や国姓爺合戦などいろいろありますが、あんな感じとっていただければいいと思います。

日本におけるオペラの位置というのは、微妙な所にあります。まず根本的に西洋と比べて違うのが、オペラというのは絶対的に大衆芸術なのです。人々が東の間の喜びを得るために、劇場に足を運びます。普段の日常生活で疲れていても、せめて劇場にいた2~3時間だけはちょっと幸せな気分になりたい、ロマンチックな気分になりたい、笑い転げたいということです。劇場側としても、せっかくお客様がわざわざうちの劇場に足を運んでくれたのだから、その時間を確証できる腕のいいスタッフやキャストを集めたいと思うわけです。そしてもちろん、

キャストやスタッフは、自分の日々の生活もお金がかかっているわけなので、お客様に対して感動が与えられるようにと全力で頑張ります。台本を書く人や、作曲をする人たちも一緒です。一度、「あいつの作品はつまらない」などと評判が立ってしまうと、次からは二度と声がかかりません。そういうこともあり、いかにお客様を楽しませるかということに徹しています。そういう意味においては、日本でも身近なところで「吉本新喜劇」のような感覚なのかなという気がします。今、目の前にいる人を喜ばすために、自分はどれだけバカをやらなくてはならないのか、かけひきをしなくてはいけないという感じで徹しています。それと通じることがあるのではないかと考えています。

チケットも、イタリアでは人気の高いオペラのチケットは、あっという間に売り切れてしまいます。多少は当日券もありますが、お客様の間でチケットの取り合いということになってしまうので、点呼制にするだとか、何時にここに集まった人だけに当日券を渡しますだとか、抽選になったりします。日本では出演者なのにチケットを手売りしなくてはならないというのが現状です。何人かの教え子たちがオペラやミュージカルの世界へと羽ばたいているのですが、やはり彼らも自分でチケットをさばかないといけならしく連絡が来ます。教え子が頑張っている姿も見たいし買ってやらねばといった状況が続いている現状を何とか打破できればと考えています。

では、何故こうも日本と西洋とでは違うのかと考えた時に、「日本では日本のオペラを作ればもっとわかりやすいのではないかと。西洋のものばかりを借りてきて、日本でやるからミスマッチになる。」という意見があります。実は日本のオペラも何本かあり、今でも作られています。しかし、作る側に「来てくれるのかわからない一般のお客様を相手に日本のオペラを作るより、とりあえず会場に足を運んでくれる評論家たちに、まずはいい作品だったなとウケないといけない」という思惑があるようで、小難しいようなマニアックな作品が多いです。それで余計に悪循環になっているのではないかと考えています。本来ならば、誰にでも分かるような簡単でぎっくばらんなオペラのほうが後々いいのではないかとこの感じがします。

これからのオペラの世界がどうなっていくのか考えると、実は心配なことだらけです。ただ、東京にオペラ専用の劇場ができたり、専属の合唱団もソリストもいたりします。名古屋でも文化振興の為に、愛知県や名古屋市の文化振興事業団が地元の人たちを育成しようと公演を企画しています。しかし、これも始めた頃は12回公演、16回公演で2週間と長かったのですが、最近はだんだんと規模が縮小していて物足りない気がしています。もちろん、文化振興事業団だけではなく、それぞれの自主企画公演や、どちらかといえば、若者を育てていこう、そしてお客様にも若者にスポットを当てて早いうちからということで、青少年のための文化公演も行われるようになってきているので、少しは安心しています。

できれば、たくさんの方にオペラを楽しんでいただけたらいいのですが、なかなか会場まで足を運ぶことが難しいし、自分の興味が引かれるような公演が頻繁に来るとは限りません。そんな時は、過去の

作品がDVD化されていますので、そういう所からも観ていただければと思います。基礎知識などはありません。先ほども言った通り、筋としては人間の本質を描いているものなので、ストーリーはとても簡単です。字幕も出ますので、大抵のことは分かります。もちろん、基礎知識としてこのストーリーがどういう内容なのかと知っておくに越したことはないですが、知らなくても充分です。そこに現れる人間のドラマを追いかけていだけで、充分楽しめるのです。その時に、批評家的な立場で観ているとつまらなくなってしまいますので、「この先どうなるのだろう。」とワクワクした気持ちで鑑賞すれば、「何故、もっと早くオペラを観てみなかったのだろう。」というような気持ちになれるのではないかと考えています。劇場で観るように部屋を暗くしてみたりアルコールやおつまみなどを近くに置いたり携帯の電源を切ったりと、雰囲気を作って観ていただければとてもいいのではないかと考えております。

実は本来のオペラに近いのではないかとというのが、昔、大須にありました。大須演芸場です。私と友達も所属していたのですが、スーパー一座というのがありまして、一階席は椅子席ですが、二階席は天井桟敷席なのです。そこでおつまみとビールを飲みながら、オペラを観ておりました。毎年のように演目を観に行くのが楽しみだったのです。残念ながら、大須演芸場も寂しいことになってしまいましたので、できるだけそういうものが復活してくれればと思います。

オペラはどうしてもと思われる方は、今流行の東宝や劇団四季のミュージカルや宝塚など、一度舞台に足を運んでいただいて、非日常の世界を体験していただくのもいいのではないかと考えています。そして、もし観ているだけ、聴いているだけでは物足りず自分もちょっと歌ってみたいという気持ちになりましたら、是非合唱団に足をお運びいただければと思います。世話人の川辺さんを始め、団員一同お待ちしております。

個人的には、10代の頃からずっと、ブッチーニの「ラ・ボエーム」、「フィガロの結婚」の主役のフィガロ、ミュージカルでは「サウンド・オブ・ミュージック」のトラップ大佐を演じたいと胸に秘めておりましたが、ラッキーなことに自分のやりたい役を全部演じることができました。更に、日本物をということで、名古屋市の文化振興事業団が取り上げてくれた、照手姫と小栗判官の物語という和物のオペラで、生まれて初めて主役のオーディションに受かりました。それがたまたま認められて、文化庁の主催公演となり、東京の芸術劇場でも再演されました。先ほどまでは西洋とばかり言っていましたが、日本の音に根ざした、こんなに素晴らしい和物のオペラがあると紹介をしました。

せっかくですので、DVDでも結構ですが、たしなみとして劇場にお運びくださいというお話をさせていただきました。ありがとうございました。

第1094回例会(6月10日)のご案内

イニシエーションスピーチ 属 ゆみ子さん